

乞食の子

鈴木三重吉

青空文庫

トウロツトの別荘のうしろは、きれいな小さな砂浜になつてゐました。今トウロツトは、そこへ下りてあすんでゐます。そこへは村の人などはめつたに來ません。ですから、海の色はへさへ出なければ、一人でそこであすんでもいゝと、おゆるしが出てゐるのでした。でも、お庭には、ちゃんと女中のジャンヌがこしをかけて、見ないやうなふりをして、ちよいちよい、こつちをみてゐます。

トウロツトは、シャベルで大きな穴をほり、その砂をつみ上げて大きなお山をこしらへました。海の中につかつてゐる、そつちこつちの大岩や、砂の上に眠つてゐる、いろんな岩にもまけないやうな、大きなお山が出來ました。

「お坊ちやま、早くいらつしやいませ。お三時でございますよ。」

トウロツトは斜面をかけ上つて、ジャンヌのお手からチョコレイトを一きれと、三日月パンを一つうけとると、またお山の方へもどつて來ました。立つたまゝ食べるのはおつくうなので、お山をひぢかけいすにしてしまつて、その上へ、どつかとこしをかけて、穴の

中へ足を入れこみました。そして、チョコレイトを、ちよつぷりづゝ、かじりはじめました。すこうしづゝかじりくして、もようみたいにはしていくのがたのしみなのです。それは、とてもおもしろいのです。

「おや、何だらう。」

トウロツトのまんまへに、ふいに影がさしました。顔を上げて見ますと、いつの間にか小さな男の子が来てゐます。いやにきたならしい子で、とてもくさくつてたまらなさうな、ぼろくゝの服を着てゐます。顔もまつ黒、両手もまつ黒で、鼻の下のところかへんに赤くなつてゐます。トウロツトはシャベルをふり上げて、

「あつちへおいで。」と、おどしつけました。男の子は片ひぢを目の上へあげて、三足あとなすざりをしましたが、そのまゝトウロツトのまん前にすわりこんで、トウロツトの方をじろくゝ見てゐます。トウロツトもその子を見つめながら、ちびりくゝチョコレイトを食べつゞけました。

ふゝん、この子の女中は、まいあさこの子を頭から足のさきまでシャボンで洗つたりしないんだから、いゝね。ぼくはいやな目をさせられて損だ。でもぼくは貴族のうちの子で、もう大きな子なんだから、ちゃんと洗つてもらはなければいけない。洗はれるのはいやだ

けれど、きれいになるのはいゝ気もちだのに、この子はなんてぶざまなんだらう。

「ほんとに、きたないね、きみは。」

かういふと、子どもは、ちよいと、目をうつぶせましたが、ぢきまた上げて、へんじもしないで、うすのろのやうにたく／＼笑ひながら、片方の手で砂をにぎつては、やみまなしに、片方の手の平へうつしく／＼してゐます。でも、たいしておもしろさうなけはひもなく、目では、じつと、トウロツトが三日月パンをもう少して食べてしまひかけるのを見つめてゐるのです。

トウロツトはその子の目のおちるところを見て見ました。じいつと見ていくと、その目は、じぶんの三日月パンの上へ来てとまるやうです。あゝ、やつぱりさうだ。三べん同じところへ来るんだもの。まちがひはない。

「きみ、三日月パンがほしい？」

トウロツトはかう言つて、食べかけをみんな口の中へおしこみました。男の子は、しよげこんだ顔をして、何をか口の中でぶつ／＼言ひました。

「きみは、もう食べちやつたの？」と聞きますと、あひての子は、ぼんやりした目でトウロツトの顔を見上げました。

「もう食べちやつた？」

男の子は、かぶりをふりました。

「それぢや、あとでぢき食べるのね。」

男の子は目を地びたにおとして、くびをふりました。そして、さつきのやうにまた砂をいぢりはじめました。

「今日は食べないの？」

男の子は何とも返事をしません。トウロツトは、では、あゝ、きつとさうにちがひないとおもひました。

「きみは、きのふは物を食べても不消化だったのね。」

男の子は目を大きくあけました。不消化といふ言葉がわからないのでへどもどしたやうですが、それでも、やつぱり、かぶりをふつて見せました。

「ぢやア、おなががいたいの？」

やつぱり、うんう。

「ぢやア、なんか、おいたをした？」

さうでもない。

「そんなら、なぜ食べないの？」

男の子は、ベツと、地びたへつばきをはきました。おゝ、いやだ。トウロツトは、つばきなんかをはかれるのは大きらひです。おや、片手でぼりく頭をかいて、もう一つの手では、指をぐいと鼻の穴の中へつっこみました。

「きみ、なんにももらはなかつたの？」

男の子は、はじめて、うん、といふやうにうなづきました。

「お母さまに、何かちようだいッて、なぜ言はなかつたの？」

「言つた。」

「言つたのに下さらなかつたの？」

「うちには何にもないんだよ。」

あはゝ、それはうそだ。どこの家うちにだつて、お居間にも、廊下や、だいどころのお戸だ
なにも、おいしいものがどつさりしまつてあるんだもの。この子はうそつきだ。さうでな
く、きつと、何かわるいことをしたばつに、お母さまが何にもありませんとおつしやつた
のにちがひない。

「きみ、何かとつて食べた、だまつて？ おぎようぎがわるかつた？ きみのとこへ来る

先生をおこらした？ でなければ、お話がうまく言へなかつたんだらう？ ちがふ？ ぢやア、なぜ、なんにも食べなかつたのさ。——家うちになんにもない？ そんならおなかぐすいてる？ さつき、さういへば、ぼく、パンをすこし上げたんだけど。ぼくは、おなかなかすいてないんだから。——でももうすつかりたべちやつたんだもの、ね。」

男の子は、だから、もうしかたがないといふやうに、うなづきました。坊やのいふことがよくわかつたのでした。

二

トウロツトは、しばらくかんがへてゐましたが、しまひにむつかしい問ひをかけました。

「ぢやア、なぜお家うちになんにもなかつたの？」

「とうちやんは、もうからねえんだよ。母ちやんと、小ちやい子は、びようきなんだもの。だから食へねえんだ。」

ぷふう。食へねえんだつて、何て下等な言葉でせう。トウロツトは、げびたうちの子と

お話をしてはいけなかった。だから、ほんとに、もうさつさと、あつちへいつてしまはなければならぬのです。だけでも、もつと、ちゃんとわかるまで聞いて見たくてたまりません。

「なぜ、お父さまは、おいしいものを買つて来いと言ひつけないの？」

「お金がねえんだ。」

「では伝票にすればいゝぢやないの？」

おうちのばあやは、お金をもたないでも買物をして来ます。そしてお母さまの伝票にかきこみます。

男の子は、また顔をふつて、手の指の間から砂を流しはじめました。トウロツトは、それこそ、こはくなるくらゐふしぎでした。何のわるいこともしない子に、お母さまが何にも下さないつてことがあるでせうか。神さまはそれを見て何とおつしやるでせう。そんな、らんぼうなことがあるでせうか。

「では、きみのお父さまは、きみにまいにちパンを下さるやうに神さまにおいのりをしないの？」

男の子は何のことかわからないやうな顔をしてゐるので、トウロツトは、もう一ぺん、

聞きかへしました。

「しねえ。」

トウロツトは、ほつとため息をしました。だからわかつた。おいのりをしないんだもの。それぢやだめだよ。

「ね、神さまのこと、一ぺんも話して下さいさらないの、お父さまは。」

「うん。神さまなんて、あるもんかいッて、おこるとさういふよ。」

何の意味か、トウロツトにはわかりませんが、何だか、それは、いゝおいのりではなさうにおもはれます。

「ぢや、きみは、何と言つて、おいのりをするの？」

男の子は、うす気味のわるい笑ひかたをするだけで返事をしません。

「ねえ。何ておいのりを上げるの？」

男の子は、やつぱり、ばかにするやうに笑ひながら、

「神さまなんてものア、うそつぱちだよ。」

と言ひました。トウロツトは、あつけにとられて、言葉も出ませんでした。神さまのことを、うそつぱちだなんて。ぼくがまいばんお母さまにをそはるとほりを言つて、おいのり

をするあの神さまのことを。——遠くの海の中を航海していらつしやるお父さまに、おかはりがないやうにと、ぼくはまいばんおいのりをするんぢやないか。その神さまが、うそッぱち？ トウロツトは、くわツと血が顔中へ上つて来ると一しよに、シャベルをふり上げて、ごつんと男の子の頭をなぐりつけました。男の子は、びつくりして、ひぢで顔をかばひながら、横目でにらみつけました。でも、それきりで、べつに食つてかゝつて来ようともしません。

「きみはわるい子だよ。不信者だよ。」

トウロツトは、もう、こんな子どもと口を利いてはいけないとおもつて、おうちへかへらうとして三足もふみ出しました。

しかし、あの子が何にも食べないといふのは、かはいさうです。だから、おいのりのことを、ちやんと、をしへておいてやらなければならぬと、おもひなほして、またひきかへしました。

「きみ、神さまにおいのりをすれば、何でもして下さるんだよ。こんばん、おねんねをするまへにおいのりをしてごらんよ。あすの朝、大きな三日月パンを下さいました。さうすれば、きつと下さるんだよ。ね。ね。」

「三日月パンがどこへ出る？」

「それは、どこにでもさ。テイブルの上にも、チョコレイトのそばにだつても。——チョコレイトなんかない？ それぢやストーヴの上になつて、ちやんとおいてあるよ。」

「でも、父ちやんがとつちやふよ。それよか、あすこんとこの岩の下の穴ん中から出るといゝや。おれがさがしに来るから。」

そんなことは何でもないことだ。神さまは、いつもは、そんな穴の中へ入れたりなんかなならないけれど、この子がさう言つておねがひすれば、人にとられないやうに、あすこんとこへ入れといて下さるにきまつてゐる。

「ね。だから、おいのりをお言ひよ。」

男の子はもじ／＼しながら、

「だつて、おれ、そんなこと、言つたことねえんだ。」

「おや／＼何といふばかりでせう。おいのりをしたことがないなんて。トゥロツトはつく／＼あきれて、ためいきをつきました。」

「それぢや、ぼく見たいに、かうしたまへ。」と、トゥロツトは、まづ砂地へ両ひぎをつきました。男の子はひぎをまげて、地びたへつけようとして、ころりと前のめりにたふれ

ました。

「ばか。」と、トウロツトはおこりました。やつと男の子はひぎをつきました。

「こんどは、お手をかう組むの。——かうだよ。——さうぢやないよ。かうするんだよ。」
何てきたない手でせう。こんな手では神さまのお気には入りさうもない。

「さあ、ぼくのいふとほりを、言つてごらん。——神さま、私はおなかゞすいてをります
ツて、さうお言ひよ。」

男の子は、おなかがすいた、と、半分口のうちでかう言つて、いも虫のやうにむくく
とからだをくねらせました。

「きみ、じつとしてゐるんだよ。そのつぎはね。——私わたしはたいへんおなかゞすいてをります。
どうぞ、あすは、トウロツトがシャベルを入れておいた、あの岩の下のくぼみへ、大
きな三日月パンを入れといて下さいまし。——あゝ、さうく。そして、アーメン。」

男の子は、

「アーメン。」と言つて、くすくす笑ひました。

トウロツトは、これですつかり満足して立ち上りました。そして、さも、この子をまも
つてやる保護者かなぞのやうに、うなづいて見せて、どんくお家うちへかへりました。

三

トウロツトは寝る間ぎはまで、あの子のことばかりかんがへてゐました。あの子があすの朝、あの岩の下から大きな三日月パンを見つけたら、どんなによろこぶでせう。トウロツトは、それをおもふと、をどり出したいほど元気がつきました。でも何だかしんぱいでもありました。ねがけにトウロツトは聞きました。

「お母ちやま、神さまに何かおねがひすれば、いつでも下さるのね。」

「それや、下さるわ。むりなことではなれば。そして、しんからおねがひすれば。」

トウロツトはそれを聞いて、すっかりあんしんしました。あの子が、あさごはんはんに三日月パンを下さいとおねがひするのは、むりなことでも何でもありません。しんからおねがひするか、しないか。それは一しようけんめいにおねがひするにきまつてゐます。トウロツトは、じぶんがパンを食べてゐるのを、あの子がじろく見てゐた、あの目つきをおもひ出しました。

トウロツトは眠りこみました。そしてゆめを見ました。神さまは、牛のついや、象のきばほどもある、大きなく三日月パンの一つぱいはいつたかごを、あの子のまへでおあけになりました。あの子の食べること、食べること。神さまは、なくなればいくらかももつて来て下さいます。男の子はすつかりよろこんで、頬ほほをまつ赤にしてをどつてゐます。トウロツトのうれしさと言つたらありません。

「坊ちやま、お早うございます。よくおねんねなさいましたでせう？」

ジャンヌはトウロツトの顔を洗ひ、お着かへをすませました。トウロツトは、あの子も、着物を洗つていただいたり、ほかの着物も下さるやうに、神さまにおねがひしなければいけないねとおもひました。お着かへをする間中、トウロツトは、あの子のことばかりかんがへつゞけてゐました。

トウロツトは、あの子が三日月パンを見つけ出しにいくときの顔が早く見たくてたまりません。おゝ、けさのお天気のすばらしいこと、これはきつと、三日月パンをしめらさないやうにするためだよと、トウロツトはおもひました。

トウロツトは二分間でチョコレイトをむりやりにたべこみ、おほいそぎで、三日月パンをポケットにおしこみました。

「お母ちやま、ちよつと浜へいつて来てもいい？」

「まあ、何でけさは、そんなに早くからいくの？ おゝ、いゝお天気だこと。ぢやアいつてらつしやい。先生がおいでになつたらよびますから。」

トウロツトは岩のところへかけつけました。神さまの三日月パンはどんなでせう。きつとパン屋のよりも、もつとくゞ金色で、そして、ずっと大きいにちがひありません。トウロツトは、すこしあの子がうらやましくなりました。

トウロツトは穴の中に手を入れて見ました。それから、のぞいて見ました。そして、ぞくりとして青くなりました。なんにもはいつてはあません。もう一ど、よくのぞいて見ました。どうしたんでせう。神さまは、きつと、ほかのところへおおきになつたのでせう。

トウロツトは、そこいら中を見まはしました。ほかの岩の下の穴をものぞいて見ました。でも、どこにもありません。一たいどうしたわけでせう。今にあの男の子が出て来ます。そして何にもみつからなかつたら、それごらん、神さまなんてうそつばちぢやないかといふにちがひありません。トウロツトのことをだつて、うそつきだといふでせう。それにあの子は、あんなにおなかをすかしてゐるのですから、かはいさうです。

「あゝア。」

トウロツトは、かなしさがこみ上げて来ました。神さまは、けさはいそがしかつたのか、それともおわすれになつたのにちがひありません。でなくば、パンがこげてゐたからでせう。おうちでも一どそんなことがありました。だつて、こげたのもいゝから一つ下さればいゝものを。

トウロツトは、がっかりしました。

と、あの子がやつて来ました。にこ／＼した顔をして、舌なめずりをしながら、大またにあるいて、ずん／＼岩の方へ向つて来ます。トウロツトはこちちから見てゐると、両足がぶる／＼ふるへ出して来ました。身も心もちゞみ上るやうです。出来るならにげ出してしまひたいくらゐです。

「あゝア。」と、もじ／＼しながら、トウロツトは両手をポケットにつっこみました。あゝ、いゝことがある。トウロツトはポケットの三日月パンをとり出して、すばやく穴のおくにおしこみました。

男の子は砂の上にすわりこんで、もぐ／＼息もつまるばかりに、ほうばつて食べました。トウロツトはそれをじつと見てゐました。今、じぶんの小さな胃袋は、まい朝のやうにふくらんでゐないのがはつきりわかります。じぶんのあさごはんだつたものが、見る／＼き

えていくのを見つめてみると、すこしばかりは、をしくなくてもありません。しかし、これで見ぶんは、人にかかるはずみなことを言つたつぐなひを、ちやんとつけたことになりました。それだけは神さまも見て下さるだらうとおもふと、やつぱり、ゆかいでした。

男の子は、すつかり食べてしまひました。

「パン、おいしかった？」

「うん。でも神さまがもつて来たんぢやねえぞ。おれ、おめえが穴の中へつっこむのを見たぞ。」

トウロツトは、まつ赤な顔になりました。まつたくそれにちがひないので、いひぬけをすることも出来ません。しかし、トウロツトの顔は、ふいにかゞやいて来ました。そしてにこ／＼いさんで言ひました。

「でもさ、ぼくに、パンを入れとけとおつしやつたのは神さまだよ。きつとさうだよ。」

トウロツトは、ペこ／＼のおなかをして、おうちへかへりました。でもお顔はとてもはれ／＼して、いかにもうれしさうでした。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第五巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1929（昭和4）年2月

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2006年7月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

乞食の子

鈴木三重吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>